

先月は、合同記念礼拝を多くの方々と共に捧げ、先週は、秋の特別礼拝として岡山敦彦先生をお迎えして、幸いな礼拝を捧げました。今晚は、後藤真英先生による特別伝道礼拝です。実りの秋に、主の祝福がさらに豊かに広がることをお祈りいたします。

弱いものへの愛

今朝の箇所は、11月の子ども祝福式礼拝で開かれることの多いエピソードです。偉大な宗教家は、しばしば子供は相手にしません。しかし、イエス様は違いました。子どもを愛し、招かれました。今朝の箇所では、乳飲み子までも、と記されています。知識も経験も、力も誉も無い赤ちゃんに、イエス様は何をしてあげられると思ったのでしょうか。赤ちゃんが一番喜ぶことは、温かく包まれること、心が通う笑顔と声だと思えます。そして、気分が悪い時、いつまでも世話をしてくれること。イエス様は、そんな乳飲み子を招かれました。泣いている子も、もしかしたら、おもらししている子もいたかもしれません。そんな存在を、ニコニコしながら抱き上げる、イエス様の姿がまぶたに浮かびます。偉い権力者を褒め称え、お金持ちにゴマをすり、特別な才能を持った人たちに歓声をあげる、そんな「勝ち組」への愛ではなく、イエス様の、何者でも無い、弱いものへの愛に、神様の御心が温かく光っています。これが主から贈り物でした。子どもたちを引き寄せながら、実はイエス様は、その周りにいる大人たちにも、神の愛とはどのようなものかを、示されました。

神の国に入れる人

この場面で、一番幸せを感じたのは、子どもたちでしょう。これは、すごいことです。しばしば、子供のお祝いは、親にとっては幸せな思い出ですが、本人にとっては退屈です。ありがた迷惑、不機嫌になることも少なくありません。けれども、イエス様は子供たちを喜ばせました。しかも、お祭り騒ぎのムードに紛れて、聞き逃してしまったかもしれませんが、意外なことに、注意深く聖書を読むと、主は「天の国に、決して入ることができない人」の話をされています！それは「子どものように神の国を受け入れない人」だと断言されました。

これはとても重要なイエス様のメッセージです。神の国という救いを、私たちはつい、「何をすれば」と考えてしまいます。功德が足りませんか、もっと犠牲を払うべきですか、知識を積まないと理解できないのかな、などなど。イエス様は、あっさりと「はい、それでは天の国には決して入れません！」と答えられます。そして、「子どものように、神の国を受け入れれば良いのですよ」と示されたのです。子どもは、無意識にそのことを受け入れ、信じられる存在です。大人はどうでしょう。疑いや、自分のプライドが邪魔をして、そう簡単ではありません。身体が幼児は柔らかく、年をとると硬くなるように、魂も頑なになります。ですから、大人が子どもになるには、信仰の柔軟体操が必要です。しかし、それは本当に嬉しいプレゼントが待つ、神の国へのはじめの一步なのです。乳飲み子たちの受け取った、暖かく優しい神の愛を、私たちも受け取りましょう。